

# アイヌ文化振興に資する河川整備の取組 —北海道特有の観光地域づくりを目指して—

室蘭開発建設部 鶴川沙流川河川事務所 計画課 ○橋本 武幸  
室蘭開発建設部 鶴川沙流川河川事務所 平取ダム管理支所 七五三 拓海  
平取町役場 アイヌ施策推進課 アイヌ文化保全対策室 島野 健二

令和6年3月に閣議決定された第9期北海道総合開発計画では、観光立国を先導する世界トップクラスの観光地域づくりやアイヌ文化の振興等といった複数の主要施策が示された。本論は、先人たちが守ってきた地域の価値を高め、保存し、次世代に受け継ぐ持続的発展をまちの主要施策として実施している平取町と協同で取り組んでいる沙流川流域におけるアイヌ文化の伝承に欠かせない有用植物の保全・創出の取組などについて報告する。

キーワード：アイヌ文化、有用植物、順応的管理、地域連携

## 1. はじめに

令和6年3月に閣議決定された第9期北海道総合開発計画（以後、第9期計画）は、2024年度からおおむね10年間の計画期間として、2つの目標（目標1「我が国の豊かな暮らしを支える北海道～食料安全保障、観光立国、ゼロカーボン北海道」、目標2「北海道の価値を生み出す北海道型地域構造～生産空間の維持・発展と強靱な国土づくり」）が掲げられ、各々の目標に複数の主要施策が示された（図-1）。人口動態の変化、気候変動問題の対応、デジタル技術活用、国際情勢への対応といった我が国を取り巻く社会情勢における課題を「国だけが主体となって解決することは困難」であり、地方公共団体、住民、NPO、企業、教育機関等の「あらゆる主体が北海道の地域特性を踏まえた将来像と目標を共有し、同じ方向性の下に各自のできることを追求していくことが重要である」とも記述されている。

課題の中の気候変動問題については、令和2年7月の社会資本整備審議会河川分科会の答申「気候変動を踏まえた水災害対策のあり方について～あらゆる関係者が流域全体で行う持続可能な「流域治水」への転換～」において、速やかに気候変動を考慮したものへの見直しが急務との方針が提示された。これを受け、本論に係る沙流川水系においても、令和6年3月に「沙流川水系河川整備基本方針の見直し」（以後、見直し方針）がされた。

本論は、第9期計画と見直し方針の策定期が重なったことを契機として、「沙流川水系河川整備基本方針（平成17年11月変更）」及び「沙流川水系河川整備計画（平成10年3月変更）」（以後、現行河川整備計画）において、主に平取町の関係機関と協同して実施してきた植物保全の取組の報告に加え、地域と取り組んできた調査経緯や、地域と取り組んだ成果や効果について述べた。

## 2. 沙流川流域の概要とアイヌ文化

### (1) 沙流川について

沙流川は、日高山脈の熊見山（標高1,175m）を源に持ち、額平川等の支川と合流しながら日高町、平取町を流れ太平洋へと注ぐ、幹川流路延長104km、流域面積1,350km<sup>2</sup>の一級河川である。

沙流川流域は、約9割を山林が占めており、豊かな自然環境が残されている。中でも上流域の原生流域は、令和6年6月に日高山脈襟裳国定公園の範囲を拡大し、日高山脈襟裳十勝国立公園として新たに指定された。下流域では、特に農業従事者が多く、平取町はトマトの収穫量が全道1位であり、日高町門別は軽種馬の生産が盛んである。

目標1「我が国の豊かな暮らしを支える北海道～食料安全保障、観光立国、ゼロカーボン北海道」

#### 主要施策

- 食料安全保障を支える農林水産業・食関連産業の持続的な発展
- 観光立国を先導する世界トップクラスの観光地域づくり
- 地球温暖化対策を先導するゼロカーボン北海道の実現
- 地域の強みを活かした成長産業の形成
- 自然共生社会・循環型社会の形成
- 北方領土隣接地域及び国境周辺地域の振興
- アイヌ文化の振興等

目標2「北海道の価値を生み出す北海道型地域構造～生産空間の維持・発展と強靱な国土づくり」

#### 主要施策

- デジタルの活用による生産空間の維持・発展
- 多様で豊かな地域社会の形成
- 北海道型地域構造を支え、世界を見据えた人流・物流ネットワークの形成
- 生産空間を守り安全・安心に住み続けられる強靱な国土づくり

図-1 第9期北海道総合開発計画の目標と主要施策

## (2) 沙流川流域におけるアイヌ文化について

沙流川は、アイヌ語のサラが語源とされ、ヨシ原、湿地等と訳される。一方で、沙流川にはシシリムカという古い呼び名があり、これはアイヌ語で上流から流されてきた土砂により河口が閉塞すると訳される。また、沙流川流域では、この流域に住むアイヌをサルンクルと言い、アイヌ文化に関連のある埋蔵文化財がこれまでも随所で発掘される等、アイヌの生活圏として広く利用されてきたことがわかっている。

## (3) 平取町のアイヌ施策

中でも平取町は、アイヌに生活文化を教えた神（オキクルミ）が天界から降り立たとされるハヨピラの伝承等、数多くの伝承地や口承文芸、アイヌ古式舞踊等が濃厚に保全・継承されてきた地域である。

また、「アイヌ文化の伝統と近代開拓による沙流川流域の文化的景観」が国の重要文化的景観<sup>9</sup>（平成19年選定、平成28年追加、平成30年追加）に選定されるなど、先んじて近代開拓の歴史とアイヌ文化の保全・継承の取組が行われている。

令和元年5月に施行された「アイヌの人々の誇りが尊重される社会を実現するための施策の推進に関する法律」（アイヌ施策推進法）を踏まえ、従前の「平取町アイヌ文化振興基本計画（平成22年3月策定、計画期間2010-2019）」を「平取町アイヌ総合政策推進基本計画（令和2年3月策定、計画期間2020-2029）」に継承を拡充させ、町の最上位計画の「第6次平取町総合計画《後期（発展）計画》（令和3年1月策定）」に基づき、アイヌ文化振興等の各種事業が幅広く推進されている。

## 3. 有用植物の保全の取組

### (1) アイヌ文化における有用植物

アイヌの人々は動植物など自然環境の中から材料を調達し、生活に必要な道具を製作し活用してきた。代表的なものを写真-1,2,3に示した。オヒョウの樹皮の繊維の糸で縫った着物、サケの皮で作られた靴、ヤチダモを台木とした漁具の銚（もり）、屋根や壁材に束ねたヨシを用いて建造された住居、ガマの葉を乾燥させて編んだござや枕などがある。

このように、アイヌ文化は生活と自然環境が密接に繋がっているため、文化の保全・伝承には自然環境の保全が必要不可欠である。

そこで、現行河川整備計画では河川工事の実施にあたっては、「アイヌ文化の伝承、振興に欠かせない素材や資源（ガマ、ヨシ、サケ等）を供給する上で必要な河川環境を保全、創出していくことに努める」と謳われており、本論では文化の保全・伝承に必要な植物（以後、有用植物）のうち、河川整備に伴い実施しているヨシとガマの保全・創出の取組事例を報告する。



写真-1 左上：着物 右上：靴 下：銚



写真-2 ヨシの活用



写真-3 ガマの活用

枕、小物入れ（写真提供：平取町立二風谷アイヌ文化博物館）

### (2) ヨシの保全・創出の取組

ヨシ（アイヌ語でスプキ）は、水辺などに自生するイネ科ヨシ属の多年草で、花穂をつけた後の枯れた時期に刈取り、束で保存・利用されている。

平取町の施策である「平取地域イオル再生事業」（以後、イオル再生事業）により平成20年からアイヌの伝統的住居（アイヌ語でチセ）の再現が平取町二風谷地区において進められ、現在チセは複数建造されており、「二風谷コタン（集落）」の愛称で、アイヌ文化を学び体感



写真4 平取町かわまちづくり整備箇所の空撮

することができる空間として親しまれ、チセ内ではアイヌ工芸作家の方々が木彫りや刺繍などの作業を実演しており、来訪者が実際に見学できる交流の場になっている。

イオル再生事業は、他にも室蘭開発建設部により基盤整備を行った平取本町地区の高水敷において平成21年度から平取町かわまちづくり（以後、かわまちづくり）によりヨシやガマ、さらには地元でオニガヤと呼ばれているオギの草本植物を植栽し、文化伝承に資する「水辺空間」の整備も進められた(写真-4)。整備当初数年間は、有用植物の生育がなかなか実らなかつたが、継続的なモニタリングと保全策により、オニガヤを優勢とした草本景観が創出された。ガマ池にも十分な水が湛水され始めたことで一定量のガマが生育し、ここで採取された有用植物を材料の一部として活用し、アイヌ文化の民具の製作が行われている。かわまちづくりの整備後も有用植物の採取をしながら定期的なモニタリングが行われており、専門家等も交えながら関係者と意見交換を行い、順応的管理が行われている。

チセは一定期間毎に修繕や建て替えが行われており、建造技術が若い世代に伝承されている。チセ一軒の建造にヨシを約70万本使用すると試算されており、約100本/m<sup>2</sup>の密度でヨシが生育している場合、面積にすると約7000m<sup>2</sup>のヨシ原が必要となる。しかし、現在の「水辺空間」のみでは十分な量の確保はできないため、ヨシの保全・創出とオニガヤの保全の取組を以下に報告する。

#### a) ヨシの移植試験

ヨシの生育適地を探り、河道掘削設計の知見とするため、令和4年度に高水敷を横断する水路を一部拡幅し、近傍に自生していたヨシの根茎を用いた移植（以後、移植試験）を行った（写真-5）。移植試験地を含め環境条件の違いがある5つの場所を選定し、令和5年度と6年度にヨシの茎丈を測定するモニタリングを行った。5つの場所のイメージ図（図-2）を示すが、A(流水部)、B,C(根茎移植箇所)、D(緩傾斜法面)、E(根茎移植や土地改変を行わずヨシが自生していた箇所)の5箇所である。

図-3に移植後、1年目(破線:R5)と2年目(実線:R6)のモニタリング結果を示す。1年目と2年目の結果を比較する

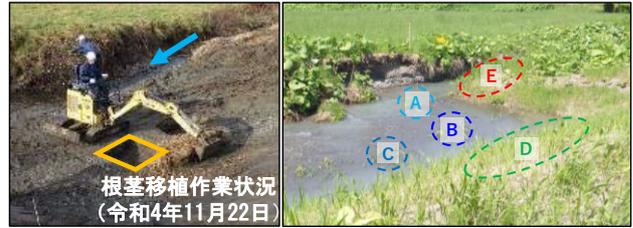


写真-5 水路拡幅・根茎移植・モニタリング箇所

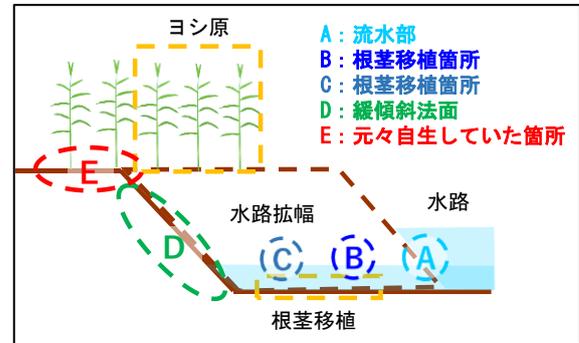


図-2 モニタリング箇所イメージ図

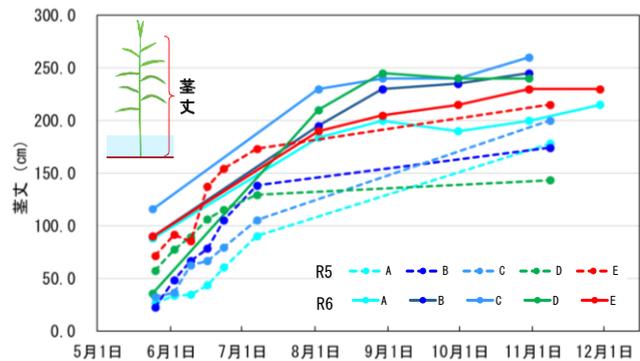


図-3 ヨシの移植試験結果



写真-6 B (根茎移植箇所)

と、Eを除く4箇所では2年目に平均50cm程度大きく成長しており、根茎移植したB,Cだけでなく、施工中に根茎が混入したと考えられるA,Dについても成長が確認できた(写真-6)。このため1箇所に根茎を集中して移植するのではなく、薄く広い範囲の表土に根茎を移植する方法でも、ヨシの定着が期待できると考えられる。また流水に浸かっているA,B,Cと浸かっていないDを比較すると、1年目はDの成長が小さかったものの、2年目には

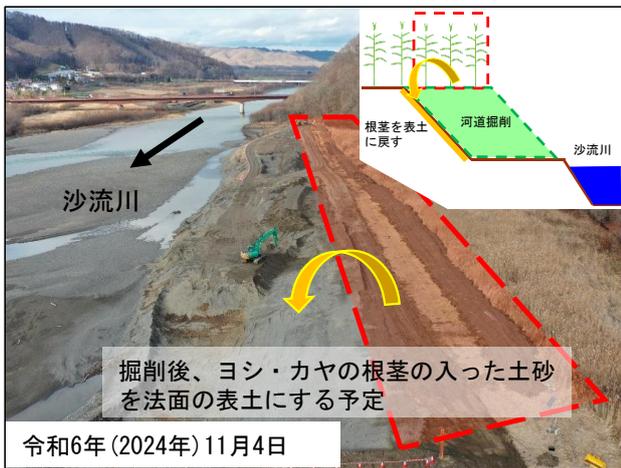


図4 掘削工事後の表土戻し

B,Cと同程度の茎丈まで成長しているため、流水に浸かっていなくても土中の水分条件等が良い場所であればヨシが成長すると考えられる。元々ヨシが自生していたEを確認するとモニタリングした2カ年とも同程度の茎丈であり、他のAからDの4箇所も2年目にはEと同程度の茎丈に成長していることから、ヨシは根茎移植後2年程度で定着すると考えられる。

以上のことから、根茎移植によるヨシ原の創出の際、土壤環境が流水や浸水といった水環境でなくても土質等の条件が良い場所であれば広い範囲への根茎移植も可能で、概ね2年程度でヨシ原の創出が期待できることから、今後もモニタリングを継続しつつ、ヨシの生育範囲の拡大と管理について検討を行い、得られた知見を河道掘削設計に活用していく。

#### b) 河道掘削の際の草本植物保全の工夫

令和6年度の河道掘削工事の施工箇所において、切り下げる高水敷はオニガヤを優勢として草本植物で覆われていたことからオニガヤの根茎を含んだ表土をすき取り現場内に仮置きし、掘削後の裸地面に表土を戻すという取組を試行的に予定である(図4)。

オニガヤの草原を保全するとともに、掘削面を草本植生で被覆することでヤナギ等の種子の発芽や自生を抑制することが期待できる<sup>2)</sup>。

### (3) ガマの保全・創出の取組

ガマ(アイヌ語でシキナ)は、湿地などに定着するガマ科ガマ属の多年草で、花穂が出た後、葉が青いうちに水底から刈り取り、乾燥させてから利用されている。代表的なものとしてござ(アイヌ語でトマ)があり、先述した二風谷コタンのチセ内に敷かれており、アイヌ文化の体験学習の際に実際に触れることができ、座ってその柔らかさを体感すると、水の中で生えている姿からは想像しづらいギャップに驚きを示す来訪者が多く、体験学習において効果的に活用されている。

一般的なサイズ(300cm×200cm)のトマを製作するためには約400本のガマが必要で、平取町では年間11,000本



写真7 骨材採取跡にできた池

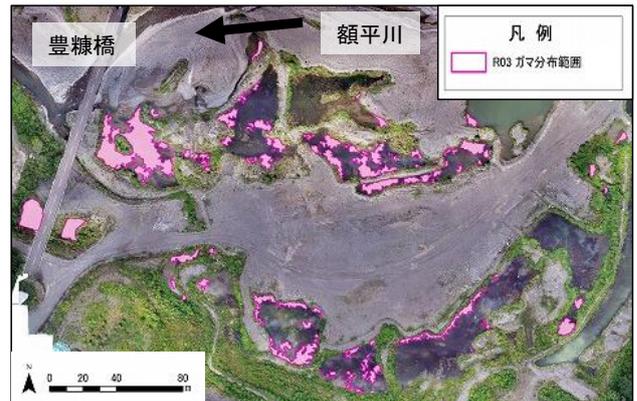


図5 ガマの分布図

程度の使用を計画しており、2.5~5本/m<sup>2</sup>の密度で利用に適したガマが生育していると仮定した場合、面積にすると2,200m<sup>2</sup>~4,400m<sup>2</sup>程度のガマ池が必要となる。

以下に、平取ダム建設期からの順応的管理により取り組んでいるガマの保全・創出の事例を報告する。

#### a) 平取ダム建設中の取組

平取ダムは沙流川の支川額平川に建設された重力式コンクリートダムで、平成27年1月に着工し、同年8月からコンクリート打設開始、令和3年4月まで試験湛水がされ、令和4年6月に完成し、7月より運用を開始している。

平取ダム建設ではコンクリートの骨材をダム上流の河原から採取したため、その採取された穴に周囲の沢から水が流入することでいくつもの池が出現した(写真-7)。その後、降雨や出水の影響により植物の種子が流入したことで、様々な植物が定着し、ガマの自生も確認されたため、関係者と協議を行い、骨材採取の池については敷き均し等を行わずに残すこととした。また、ガマをさらに増やすために、平成30年度から播種による方法、苗を植えた土のうを設置する方法、育苗ポットで育った苗を植える方法の3つの方法による増殖の拡大を試みた。その結果、令和3年度には、生育範囲3,194m<sup>2</sup>、推定本数38,972本のガマが確認された(図-5)。

しかしながら、ガマの増殖が見られた範囲は、サーチャージ水位以下であったため、令和4年4月までの試験湛水により水没し、多くのガマが消失した。

#### b) 平取ダム建設後の取組

試験湛水後の令和4年6月に調査した際には、ガマの確



写真-8 新たに定着したガマ

認がされなかったが、令和6年6月の現地調査では再び定着していることが確認された（写真-8）。生育範囲207m<sup>2</sup>、推定本数3,725本の結果を得、試験湛水前の令和3年度と比較すると、生育範囲は6.5%、推定本数は9.6%とまだ小さい範囲の再生であるが、消失したと見られていた箇所から自生し、その範囲が拡大していることから、当該箇所はガマにとって適した環境であると考えられる。

今後は、試みた3つの方法のうち、育苗ポットによる植栽方法が、最も確実にガマが定着する方法であったことから、手間と時間を要するがポット苗による植栽も取り入れながら生育範囲の拡大を図っていく。また、製作に携わる方から、水面下の部分がトマの材料として編みやすいといった知見を踏まえ、池の水位が上がるよう各池の流出口に堰板の設置や、池を掘削して深くする等、関係者と現地確認しながら取り組む予定である。

#### 4. 関係機関との取組

##### (1) 室蘭開発建設部地域文化勉強会

鶴川沙流川河川事務所では、職員及び工事業務受注者、日高北部森林管理署等の流域の関係者を対象に、アイヌ文化や流域の歴史、沙流川総合開発事業による地域への影響と現状についての基礎知識を学び、地域が目指す将来像をまとめたDVDの視聴など、工事業務の円滑な実施に資することを目的として、「室蘭開発建設部地域文化勉強会」（以後、勉強会）を実施している（写真-9）。

前述のとおり、令和6年度の河道掘削工事では、掘削面に表土としてヨシ等の根茎の入った土砂を敷きならす施工を予定しているが、勉強会に参加した工事業者からは「勉強会に参加したことで、工事の目的を知ることができて良かった」等、肯定的な意見が聞かれた。これは冒頭に記述したが、「あらゆる主体が北海道の地域特性を踏まえた将来像と目標を共有し、同じ方向性の下に各自のできることを追求していく」といった観点の取組の一環ともいえ、今後も継続予定である。



写真-9 室蘭開発建設部地域文化勉強会（座学）



図-6 ノカピライウオロ標本園 地図

##### (2) 平取町地域住民の参画による協同調査の取組

平成9年の二風谷ダム裁判<sup>3)</sup>の判決を背景に、平取ダムの建設にあたって、平取町は平成15年度に「アイヌ文化環境保全対策調査委員会」を設置し、地域住民が主体的に参画した調査を平成15年から平成17年の3ヶ年にわたり実施した。平取町役場内にこの調査を担う専門の部署として「アイヌ文化保全対策室（以後、対策室）」を設置し、平取ダム周辺を中心とした聞き取り調査、文献調査、及び現地調査といったアイヌ文化の保存に向けた各種調査を行い、平成18年3月に調査報告書<sup>4)</sup>をとりまとめた。

室蘭開発建設部はこの調査報告書を踏まえ、平成18年8月に「平取ダム地域文化保全対策検討会（以後、検討会）」を設置し、検討会以外の場でも地域と多くの議論を重ね、保全対策の具現化を図ってきた。令和4年4月にオープンしたノカピライウオロ標本園（図-6）について具現化に向けた取組の経緯を含め以下に紹介する。

##### a) 調査経緯とノカピライウオロ標本園

対策室で実施している調査は、主として精神文化の保全対策、動植物（魚類も含む）の保全対策、生活文化の保全対策、アイヌ文化の普及活動などで、平取ダム建設にあたっては特に動植物の保全に対して多くの調査が行われた。

動植物に係る取組については、特にアイヌ文化に必要な有用植物（ガマやヨシあるいは樹木）が湛水することで水没することが確認されており、その樹木や山菜などを移植し、今後のアイヌ文化の普及活動と開発行為の及ぼす影響を緩和する取組として標本園の整備が必要とされた。標本園は、平取ダムからも近く、平取町の名所で

表-1 ノカピライウオロ標本園の主な植物

和名	アイヌ語	アイヌ文化の活用例
オヒョウ	アッニ	着物（アットウシミア）、反物（アットウシ）
エゾヤマザクラ	カリンパニ	矢筒（イカヨフ）、火付け炭入れ（カラバシントコ）
ハンノキ	ケネ	おしやぶり（テクコケベ）
ヤナギ類	スス	祭具一種（イナウ）
ハルニレ	チキサニ	熊手（アレウエマタブリブ）
ヤチダモ	ピンニ	鋸（マレフ）、魚とりかぎ（アブ）
ナラ類 （ミズナラ、コナラ）	ペロ	臼（ニス）、まな板（イクタニ）、櫛（アッサフ）
クリ	ヤムニ	食用
カツラ	ランコ	舟（チフ）
ガマ	シキナ	ござ（トマ）
オオバユリ	トゥレフ	食用：オオバユリの団子（トゥレブシト）、澱粉（イルフ）
ヤチゼンマイ	ソロマ	食用
ギョウジャニンニク	ブクサ	食用



写真-10 ノカピライウオロ標本園の来訪者への説明



写真-11 英国での展覧会開催時の説明

もあるすずらん群生地に隣接した場所が候補地とされ、具現化に向けては、植物の専門家を交えた現地調査や関係者と多くの議論を重ねながら取り組んだ。

敷地面積4haに37種類の樹木約330本が植樹され、令和4年4月の開園を迎えた。表-1にその詳細を示した。開園当初は背丈2m程度の苗木であった樹木も今年3年目においては背丈を3倍程度に伸ばし、近隣の学校や大学などの研究機関からの来園者に対し、対策室職員によるアイヌ文化における植物の利用方法等について実際の民具を用いながら分かりやすい説明が行われており、アイヌ文化の理解促進の普及活動が行われている（写真-10）。

(3) 平取町関係者による海外におけるアイヌ文化の発信  
令和5年11月16日から令和6年4月21日の期間、「Ainu

Stories : Contemporary Lives by the Saru River」展がイギリスにある幅広い層に日本の多様な魅力等を発信する施設のジャパン・ハウス・ロンドン<sup>5)</sup>で開催され、平取町役場職員をはじめ、平取町のアイヌ文化の保存・伝承に関わる方々により、アイヌ文化伝承の取組やアイヌの伝統食を通じたアイヌの精神性についての説明と試食、さらに古式舞踊が披露された（写真-11）。

多くの参加者から、アイヌ文化の自然との共生について関心が寄せられ、対策室の取組について国が関与している画期的な取組として多くの関心が寄せられた。

現在、平取町二風谷地区には海外からの観光客や研究者が日々訪れており、特に、欧米からの研究者がアイヌ文化に関心を持って来町しており、町の観光事業と連携しながら、ウポポイ（民族共生象徴空間）とも協働した様々な取組が行われている。このような取組は、第9期計画に述べられている「先人たちが守ってきた地域の価値（自然環境・文化）を高め、保存し、次世代に受け継ぐことで、観光を地域の経済や社会の持続的発展につなげ、地域住民が観光による恩恵を実感できる」取組の一つになっているといえる。

## 5. まとめ

気候変動により水害や土砂災害等のリスクが高まっているため、総合的かつ多層的な水災害対策をあらゆる関係者が協働して流域全体で行う「流域治水」の取組が令和2年より始まっている。また、見直し方針において、「沙流川の自然豊かな環境を保全・継承するとともに、アイヌ文化の保全・継承等、地域の個性と活力、歴史や文化が実感できる川づくりを進めるため、関係機関や地域住民と共通の認識を持ち、連携を強化しながら、治水、利水、環境に関する施策を総合的に展開する」と新たに謳われた。

沙流川流域の現行の河川整備計画（直轄管理区間）は、見直し方針を踏まえ変更が予定されている。今後も治水整備を図りながら3章及び4章で報告したような有用植物の保全・創出の取組をあらゆる関係機関とより一層連携し、推進していくことが重要である。

### 参考文献

- 1)北海道平取町：平取町文化的景観保存計画書（三次選定申出版） 2018年1月26日
- 2)樹林化抑制を考慮した河岸形状設定のガイドライン（案） 2011年3月 北海道開発局 寒地土木研究所
- 3)二風谷ダム裁判（平成五年（行ウ）第九・権利取得裁決等取消請求事件）1997
- 4)北海道平取町：沙流川地域文化評価業務 アイヌ文化環境保全対策調査総括報告書 2006年3月
- 5)外務省 HP [https://www.mofa.go.jp/mofaj/p\\_pd/pds/page24\\_000421.html](https://www.mofa.go.jp/mofaj/p_pd/pds/page24_000421.html)